石垣謙二著「助詞の歴史的研究」

松尾拾

私は大変な誤算をしてしまったと後悔している。石垣氏のこの細緻な研究を紹介するのは、あまりにも与えられた紙数が少なかったことを知ったからである。そこで記述に精粗をつける形式をとらざるを得なくなったことをはじめにおことわりしておく。

石垣氏が、その短い一生を通して最も関心をもたれたのは、主格助詞の歴史的研究であったようである。卒業論文もそれであり、そのすぐれた業績の半ばはそれに関するものである。それゆえ、本書に集められた六編のうち、主格助詞に関するものを主として見てゆこうと思うが、まず、その後の氏の研究の方法に対して不抜の自信を与えたと推測される「作用性用言反撥の法則」から紹介しよう。

この論文は、鈴木朖が「言語四種論」で国語におけるすべての活用語が、終止形がイ韻で終るものとウ韻で終るものの二つに分れ、この形態的差異がそのまま、事物の形状を表わすもの（形状の詞）と事物の作用を表わすもの（作用の詞）という意義的事実の差異に対応し、相犯すことがない、と説く所に触発され、これを、一方国語では、助詞「の」によって構成される名詞句にきわめて性質の異なる二種類があり、同じ形態をとりながら、その意味は全く違う、この種類別を形態的に解決できないか、という問題と結合させたものである。その結果氏は次のような注目すべき法則を発見した。「名詞句を主部とする総ての複文に於て、名詞句の用言か複文の用言か少くも何れか一方は必ず形状性用言である。名詞句の用言も複文の用言も共に作用性用言なる事は原則として絶対に存在しない。」（二三六頁）この法則は、適用範囲が広く、ほとんど例外のないもののようで、氏の着想の非凡さと精密な実証的な研究法とが相まって生み出したすぐれた発見である。ただ、氏が朖の分類に、後天的な意義変化によって、元来作用性用言であった形状的用言に転じた、と認める数語を補足している中に助動詞ずと並んで「む」をも入れている。この点はどうであろうか。「ず」を活用形式の類似から形容詞式と認めた（二一八頁）のなら、同じ理由で「む」は動詞式と認めるべきではなかろうか。「む」についてはその意味の面からのみ判断しているのはなぜであろうか。それはとにかく、氏はこの法則を応用することによって、「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ」でふたたびみごとな成果をあげた。

この論文の主旨は次のようなものである。主格の「が」は、上代では喚体句（見るがともしさの類）といわれる形式のものを除いては、用言をうけることはなかった。この喚体句の「が」は、形態上からは連体動詞と見るべきであるが、意味上は主格助詞に近いと見ることもでき、これを連体助詞から主格助詞へと移ってゆく過渡期

のものと見ることができる。こうして、上代に用言をうけ得なかった主格「が」が、平安時代になると用言をもうけるようになる、氏はこの現象を重視し、接続「が」の発生する根拠を遠くここに求めることができると断じる。「が」が用言をうけ得るということは、名詞句をうけ得るということである。その名詞句の性質については前記の論文に詳述された。氏は、「が」がうける平安時代の名詞句を精査して、三種に要約した。（三〇頁）

1 やがて罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり（竹取）―作用性名詞句をうける。

2 女のまだ世経ずと覚えたるが人の御許に忍びて（伊勢）―形状性名詞句をうけ、名詞句の用言は主体を装定する。

3 同じ中納言、かの殿の寝殿の前に少し遠く立てりける桜を、近く堀り植ゑけるが枯れざまに見えければ（大和）―形状性名詞句をうけ、名詞句の用言が客体の属性を装定する。

氏はこれをそれぞれ主格形式第一類・第二類・第三類と名づけるが、ここに著しいのは、「が」のうけるものと「が」のかかってゆく用言との結合のしかたが、1→3と漸次緊密度が弛緩してゆく傾向が見られることで、これは「が」の上の部分と下の部分とがたがいに独立しようとする動きである。この傾向が平安中期から院政期にかけて益々顕著になり、ついに「が」は接続助詞と見られるようになる。その際、接続助詞になりきったと判定すべき基準が必要になるが、氏はこれを、(イ)「が」の下の部分に主体を示す語が現われるか、(ロ)「が」のうける用言もかかる用言も共に作用性用言であるか、の二点に求める。ここに「作用性用言反撥の法則」が客観性をもつ基準として大きな発言力をもつのである。氏は、この基準によってさらに院政期以後の資料から六つの類（五一頁）を見いだし、それを関係づけることによって、「が」の接続助詞としての用法がいかに広がり、確立してゆくかを執ように追求している。かくて、主格形式「が」の発展過程と主格「が」から接続「が」の発生する過程は全く軌を一にし、その共通の原動力は終始一貫して、「が」の上下が独立しようとする傾向であり、結合力の弛緩である、と結論する。氏の論旨は明快であり、強い説得力をもって読者に迫る。この論文の序で、氏はその研究法につき次のように語っている。助詞の史的研究は共時的研究をいくら積み重ねても達成されない。なぜならば、言語は時の流れに応じて変遷するのに、ある時期の静的な言語状態を一つの体系に組織する共時的研究では微小部分は切り捨てられてしまう。ところが、この微小部分こそ言語の動的な状態を端的に示す所であり、二つの異なった状態を有機的に連結する部分である。この動的な変遷の相を明めるためには自ら別の方法によらなければならないと。この別の方法こそこの論文で氏が実践した言語それ自体の内部における過程を観察し、そこにいかにして変遷するかという必然性をさぐらんとする方法である。さらに、「助詞史研究の可能性」では右の主張が理論として述べられる。すなわち、助詞がうけもつ職能は文法機能だけであるから、助詞の歴史とは文法機能の歴史である。したがって、助詞が変遷する場合は、それの属する全文法機構によって規定され、言語自体に内在する必然性に支配されることになるがしかしこの必然性は内在するがゆえに、かえってその言語社会の人々の主観には変遷

とは意識されず、全くの連続である。研究者の客観的観察に対してもきわめて小刻みな連続に近い状態を呈する。いわば、スペクトルにおける色の配合のように、各段階にはどこにも明瞭な境界線は見いだされない。前述の「微小部分」とはこのような構造をもつものであるが、これこそ助詞の機能の変遷を確めるに重視されなければならない部分である。したがって、助詞史研究は言語自体に内在する必然性をたどることであり、そのためには既成の各時代の共時的研究を悉皆御破算にして、新規まきなおしに出直さなければならない。このように言語の内部でのみ研究を完成させることが国語の科学として純粋性を保有するゆえんであり、助詞史研究の特質はここにある。なお、助詞の変遷を左右する要素は文法機構以外にも、一、音韻変化、二、他国語の影響、三、方言差、四、階級性別差等が考えられるが、国語においては前二者は文法機能にまでは関与しないし、後二者についても文献を扱うにあたって、資料の性質を吟味し、方言圏を同一にし、時代を限定する等、慎重な注意を払えば、その影響を正しく位置づけ研究の純粋性を保つ事は容易にできる。かくして助詞史研究は可能になる、これが氏の主張である。この論文はいわば氏の研究の結論ともいうべき位置に生れた著作であるが、かく対象をとらえ分折し、あらゆる対象の深奥から、変遷の推進力としてはたらく「終始かわらざる一貫した目的性」をえぐり出してくる洞察力の鋭さには、何人も賛嘆のことばを惜まないであろう。しかし、賛嘆しつつも、私はなおそこに一抹の物足りなさを感じる。以下それが何であるかを述べる事によって、書評としての責を果そうと思う。私が疑問とする所は、「主格「が」助詞から接続「が」助詞へ」の第四節「主格形式から接続形式へ」における氏の所説についてである。氏はこの節で、接続の「が」の用法が発生する経路を源氏物語の「が」について跡づけ源氏には接続助詞と認めなければならない例はまだ存在しないが、前記主格形式の第二類に属するものの中には、新しい例を見いだすとして、元来この類の形状性名詞句の大部分は、女のまだ世経ずと覚えたるが…」のように「の」助詞を有するのであるが、源氏には1助詞を伴わない、髪〇いときよらにて長かりけるが、分け取りたるようにおち細りて」（真木柱。他の例は略す。以下同じ）2係助詞を伴うもの、「むすめの尼君は上達部の北の方にて有りけるが、其の人亡くなり給ひて後、むすめ唯一人をいみじくかしづきて」（手習）3体言の部分が全然現れないもの、「そこら集ひ給へるが、我も劣らじともてなし給へる中にも」（初音）等をあげ、これらは、形状性名詞句の目印ともいうべき「の」助詞が存在しないために、名詞句の用言が装定の関係にあるというより述定に与っているように感じられる、「蓋し係助詞は常に述定の場合に用ゐられる助詞であり、助詞を伴はない形式と主語の現れない形式とは、国語に於て夫々主述関係を表示し又文を構成するに最も普通な文法形態だからである。」（三五頁）しかし「主格助詞としての「が」のみを知って未だ接続助詞としての「が」を知らない（平安中期の）人々は恐らく右の諸例を主格形式第二類の一変型と見做すであらうと思はれる。」（三五頁）という理由で、氏は、助詞なしや係助詞を伴う構文を「の」で構成される主格形式第二類と同類と見ている。さらに、主格形式を最も端的に接続形式に近づかしめる原因は、「の」

のかわりに「が」助詞自身によって形状性名詞句が構成されるものが存するということにある。として、「さて又常陸に成りて下だり侍りにけるが、この年頃音にも聞え給はざりつるが、此春上りて彼の宮には尋ね参りたりけるとなん」(宿木)をあげる。これについても、「先の「が」は何であろうか。意味上之も主格助詞と考へ得ない事はないが」(三六頁)と自ら疑いながら、「の」には用言をうける能力がないから、これは、「が」が「の」の職能を代行しているのだと見ている。しかしながら、この(装定とも述定ともつかない)矛盾を両立させる為に、同格的であって而も述定に与る「が」助詞といふものが冥々の間に形成せられる事となるのである。」(三七頁)として、有名な「いとやんごとなき際にはあらぬが勝れて時めき給ふ有りけり」を例示し「『勝れて時めき給ふ』が、装定的な性質を脱却して述定力を獲得しながら、『いとやんごとなき際にはあらぬ』に対して、単なる述語とはならずに互に対等の資格に立つと、『いとやんごとなき際にはあらず(同時に又)勝れて時めき給ふ』といふ関係が成立し」、(三八頁)接続助詞と見られるにいたる、という。この論旨は、氏の主張する言語自体に内在する必然性によって支配される所を跡づけたものと見られ、共時的研究の集積では絶対にとらえ得ないとされる最も興味ある過渡期の姿を露出せしめた部分であろう。しかし、私は、氏が逡巡されながらもついに主格形式第二類の変型と定めたこれらの例すべてを、主格を重複させた形式とみることはできないか、という疑を依然としてもつのである。

では、氏はなぜこれらを主格とは認めなかったか、その原因をたどってみると、次のことばに行きあたる。「形状性名詞句がかやうな特殊な構造(装定関係にあることをさす)を形作るのは全く「の」助詞の特性に拠るものである。「の」助詞には古くより…「丹管士乃将薫時(ニホヘルトキ)能桜花将開時(サクラノハナサキナムトキ)」(万葉六)の如く同種の語句を結び付ける同格的な用法が存在し、……かかる同格的な用法は「の」助詞以外の助詞には無い所であるから、形状性名詞句は理論上「の」助詞に拠らなければ構成され得ない筈であるが…」(三三頁)つまり、氏は、同格的用法は「の」以外にはなく、形状性名詞句はこの同格的用法が発展した用法であるから、必ず「の」で構成さるべく、したがって、助詞なしや係助詞を伴う場合も必ずや形状性名詞句という形態において対象を解すべきだ、と考えているようである。

しかし、この時代に次のごとき一つの用法があったことをわれわれは知っている。

昔ひんがしの五条におほきさいの宮おはしましける西の対に住む人ありけり(伊勢)

愛宕といふ所にいといかめしうその作法したるにおはしつきたる心地いかばかりかありけん(源氏桐壺)

昔物語にもあだなる男、色好み二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひに寄る方ありてこそあめれ。あやしう、浮きても過しつる有様かな。(源氏若菜下　紫上ノ感慨)

院政期にも

而ル間参河ノ国ニ八橋ト云フ所ニ至ス(今昔二十四)

亦十四歳ニテ家ヲ出テ京ニ入テ叔父ニ。仁徳ト云フ僧ニ付テ始テ比叡山ニ登ル(今昔十一)

また、「を」格の例はまれであるが、それ

でも

御迎へに来む人をば長き爪してまなこをつかみつぶさん（竹取）

よく鳴る和琴を調べととのへたりけるをうるはしくかき合はせたりしほどけしうはあらずかし（源氏）

人の仕うまつる事をも世の苦しびとあるべき事をば（藤壺ハ）とどめ給ふ（源氏薄雲）

これらは、いずれも第一の「に」・「を」で示された概念の範囲を、第二の「に」・「を」で限定し、詳述する形をとっていることを私は重視したい。こういう一つの文型が、「に」格にも「を」格にもあるとしたら、これは古代語における一つの文型と認めることができようと思う。しからば、これから推して、主格にもこの文型があったと考えることも必ずしも不自然ではないだろうと思う。それは、氏が主格形式第二類の変型としたものである。（主格形式の繰返しには、助詞なし（ロで示せば）の繰返し□…□、が…が、は…が、は…は、□…□が等々種々の組合せが現れる。）

ところで、断っておくが、私は、氏がこれらを主格形式第二類の変型と認めたのは誤りで、それは主格である、と言いたいために右の例示をしたのではない。これらの格は、決める根拠がない現在では、実はいずれとも決められない格としてそっとしておくのがほんとうなのであって、氏のように、これを装定関係にある、と決めてしまうのは、あまりに一面的な見方ではないかと言いたいのである。なお、一例を示せば

今昔、右近ノ馬場ニ五月六日弓行ヒケルニ、在原業平ト云フ人、中将ニテ有ケレバ、大臣屋ニ着タリケルニ、女車□屋近ク立テ物見ル有リ□（今昔二十四）

において、女車の格が不明である。これを前述のように、主格とも主格形式第二類の変型とも見得るばかりでなく、さらには「女車を屋近く立て物見る」と見ることもできよう。古代語を扱う場合、かような格不明の例に出合うことは避けられないことである。これを決めようとすれば、それぞれ格助詞を伴って明証のある傍例を集め、その示す文型と右にあげたような格不明例の示す文型とを比較検討し、帰する所を定めるという手続を経なければならないと思われる。学問的操作の途上では、これをいずれかに断じようとする誘惑を退けることは容易なことではないが、私はこの点に関してはなはだ臆病になっている。私が氏の論証に物足りなさを感じる根本の原因はここにある。右に述べたことは、当然氏が助詞の変遷の推進力として強調する言語自体に内在する必然性の問題にもひびいてくる。必然性というも、それがいかに客観的資料によって堅められていようとも、必然性を納得させてくれる例はこれだ、と決める最後の決定権をもつものは観察者である。したがって解釈である。解釈の決定はできるかぎり多方面から観察した上で行われるべきであろう。たとえば、「へ」助詞の変遷を論ずるにあたって、類似の職能をもつとされる「に」助詞との交渉面に氏は触れていないごとき。また、前記「に…に」「を…を」形式の文型の存在が主格形式第二類から接続「が」への変遷過程に何の影響も与えなかったかどうかの吟味のごとき同一共時態における文法機構の他の要素とのからみあいが変遷の動向に及ぼすべき影響をも一応考慮にいれるべきではなかったかと思うのである。氏は、国語の科学としての純粋性を保とうとするあまりに、問題を一助詞の関係する範囲内でのみ解決しよ

うとされたうらみがある。また、氏は、助詞の変遷に常に一貫した目的性を認め、これをきわめて鮮かに整理された形で示された。その功績はもとより永久に記憶さるべきであり、われわれを益する所が多い。しかし、氏の用語「目的性」に氏が、どれだけの内容を含めておられるのか、私にはよく読めない。通常意味する所の「目的性」という語には、人間の意志が当然関与してくるはずであるが、氏の所説にはそれが感じられない。言語が自律的に変遷してゆくような趣きさえ感じるのは、私の浅い解釈のためであろうか。私の理解する所がもし正しければ、氏のいう「目的性」とは「傾向」と言い換えても通じるのではないかと思う。「目的性」とは、かくかくの「傾向」がなぜ見られるのかを問う段階で使用されるべきことばではなかったか。

なお、残る三編について簡単に紹介しておこう。「助詞「へ」の通時的考察」は、上代以来その職能・用法にほとんど変化がないと一般に考えられてきた「へ」にも、詳しく観察すれば変遷があることを、これをうける用言の種類との関係から考察したものである。上代の「へ」にはそれをうける用言にある制限があり、「へ」は方向性と接着性を合せ持っていたが、用言の種類が拡大してゆくにつれて、しだいに具体的な接着性をふり落し、単に方向性を示すものとなってゆく。そういう「へ」の姿を見せられて、私も、氏同様にいわば、「よく見ればなづな花さく垣根かな」といったおどろきをおぼえる。この論文が持つじみな味に比べ、「助詞「から」の通時的考察」では、「から」の原義をさぐり、その変遷をたどるに「まにま」「なべ」等の語義との関連を考証してけんらんたる趣があり、それが平安時代以降、なぜ「より」に圧倒され、室町時代にいたって、なぜ逆に「より」を圧倒し去るまでにその勢力を回復し得たかを、豊富な資料によって立証している。氏の着想の妙、論証法の特色が遺憾なく現れた一編である。そしてここでも氏は、変遷に一貫する目的性を「他の格助詞におけると同様、また独立詞の付属辞化であり、具体的なものの抽象化」（一八四頁）に認めている。最後の「あるといふことはどういふことであるか」は、世上日本語が情意的主観的な言語であり、理論的客観的な学的概念を表わすには不向きだ、といわれるに対し、和辻博士は哲学の根本問題を表題のごとき日常の日本語に集約して検討し、日本語は哲学的思索を荷う力に欠けていないと結論した。その説に石垣氏が賛成しつつも、なお国語学的観点から吟味し、これに修正を試みようとしたものがこの論文である。博士は「いふ者はだれか」という点を検討し、これを「個人的・社会的なる人間」であると認めたが、こう考える限り「あるということ」は純粋な客観的表現とはなり得ない。しかし、博士が見落した「といふこと」の「と」を重視することによって、「いふ」と「といふ」との意味するものが全く異なることを氏は指摘して論を展開している。すなわち、「といふ」は他動詞で「名づく、となふ、よぶ」であるよりも「自ら己自身をよぶ」、つまり自動詞「名告る」に近く、動作ではなく、状態を表わす点に本質があることを論証し、状態を表わすゆえに「いふ者」は実は「あるといふこと」の「こと」自身であり、「こと」がその内容「あり」を自ら顕はにしていることになる。ということは、主体がただちに客体の属性そのものであり得るということである。ここにいたって博士のごと

く限定された「個人的・社会的人間」を主体と認める要はなく、「あり」それ自体を純粋な客観的把握において表現することが可能になった、と論じて、日本語は普通妥当的な哲学の根本概念を荷うにたえるものである、という。この論文は著しく思弁的で、他の諸編とは性質を異にしたものであるが、ここに採り上げられた「といふ」に示されるような日本語の特殊な性格を全般的に考察しようとするものにはよい指針となるものであろう。

かく書き終って私は感慨なきを得ない。解説によれば、氏をしてこの輝かしい業績を残させた動因となったのは、同窓の先輩加納協三郎氏の勧誘であったという。加納氏は私の親しい友である。その氏は石垣氏と同じ病に倒れ、石垣氏よりさらに若年で他界され、その後を慕うがごとく石垣氏も短い生涯を閉じられた。私は、天がこのきわめて有為な二氏になお幾星霜の齢を許さなかったことを残念に思う。助詞研究のごとく、労多くして功あがらない部門において、両氏のごとき一騎当千の勇者が次々と倒れ去ることに私は限りない愛惜と不安の念を覚える。

（東京神田一ッ橋　岩波書店・昭和三十年十一月発行　A5二六二頁　五五〇円）

―文部事務官―